

### シューベルトの歌曲

エルンスト・シュルツェの詩による「春に」は 1826 年の作。晴れやかな早春の季節にもかかわらず、失恋の歌である。しかし、過ぎた恋を懐かしむかのように曲調は穏やか。「すみれ」は 1823 年の作。演奏時間が 13 分を超える大曲で、スマレの不幸な顛末を物語る。しかしそれほど深刻にならず、様々な花に仮託した可愛らしさが旋律にもあふれている。詩はシューベルトとも親交のあったオーストリアの詩人フランツ・フォン・ショーバーによる。

### シューマン：《詩人の恋》

ドイツ・ロマン派の詩人ハインリヒ・ハイネ『歌の本』所収の詩をもとにした連作歌曲集《詩人の恋》(全 16 曲)は、1840 年、シューマンのいわゆる「歌の年」に書かれた。シューマンの歌曲への創作意欲が爆発的な盛り上がりを見せ、代表的な歌曲集が次々に生み出された年である。また、義父ヴィークとの数年にわたる確執が決着し、晴れてクララとの結婚が叶った年でもあった。

《詩人の恋》にもクララへの熱い想いや、長く苦しい恋愛の過程で得た果実が詰まっており、恋の様々な側面が描き出されている。特にピアノが、伴奏の域を越えて歌に美しく寄り添い、時に雄弁に情緒を物語る。

### R.シュトラウス：《おとめの花》

シュトラウスと同時代のドイツを生きた法律家・詩人フェリックス・ダーンの詩による全 4 曲の《おとめの花》は 1886~88 年に書かれた。リヒャルト・シュトラウス最初期の歌曲集で、若い娘になぞらえたキャラクターが 4 つの花それぞれに与えられている。青紫色の可憐な花「矢車菊」、鮮烈な深紅色の「ポピー (ヒナゲシ)」、小さな黄緑色の上品な花「木づた」、神秘的な佇まいの「睡蓮」と、曲調も少女の性格を表している。

### R.シュトラウス：《4 つの最後の歌》

《4 つの最後の歌》は、R.シュトラウスが亡くなる前年 (1948) の作。タイトルは作曲者自身がつけたものではないが、まさしく最後の作品である。二つの世界大戦を生き抜いた老大家は、まずアイヒェンドルフの詩「夕映えに」に接し、これに音楽を付けることを思い立った。そして、折良く手にしたヘッセの詩集から選んだ 3 篇に作曲したものと合わせた。老境や死との対峙、自然の美しさなどが渾然一体となり、音楽全体が幽玄な光を發して、聴く人の胸をうつ。